

「子どもと読み聞かせ・絵本」実践研究

体験を通して学ぶことに関する一考察

浅川 陽子*

1. 研究の動機

江戸川大学メディアコミュニケーション学部子どもコミュニケーション学科では、4年間の学修によって幼稚園教諭一種免許と保育士資格を取得することができる。そこで学科カリキュラムは、こどもを中心として幅広いコミュニケーション能力を養うことを目指して組織されており、「体験することが一番の勉強」（2016 江戸川大学ガイドブック、P80）と学生向け案内にある通り、保育の現場を体験する機会が充実している点に一つの特色がある。

この特色がどのように記述されているか、学科紹介の文言の中で「体験」に言及している部分をいくつか抜き書きする。

- ・理論を知り、実習科目やボランティア活動を通じて実体験と経験を積み重ね、こども・保育者、地域社会をつなげる力を磨きます（同 P81）。
- ・じっくり学び、しっかり体験。だから「人間力」が磨かれます（同 P83）。
- ・一緒に過ごす経験を積み重ねることで、こどもへの関わり方や援助についてなど、多くのものを学ぶことができます（同 P83）。

ここで私が注目したいのは、「しっかり」と「積み重ねる」体験の中身と方法である。ただ体験すればよいというものではないことは自明である

が、何をしっかり体験すれば人間力につながるのか、体験を積み重ねるとは実際にどういう学びを含む営みなのか、その具体的な過程や、そこで育つ学生の姿は、これらの文言からは見えてこない。

それらはむしろ、実際に学科に在籍する学生を目の前にして、学生とともにつくる各授業において見いだされる。体験の意味は学生自身が価値づけるものとして問われるべきであろう。

したがって、「体験を通して学ぶこと」が学生自身にとっていかなる意味をもつのかを、学生の側から明らかにし、学生の力になり得る体験の積み重ねとはどうあるべきなのかを考えるためには、体験による学びの展開を試みた授業実践の振り返り＝実践研究がぜひとも必要である。

さらに筆者自身、保育者養成に携わる中で、保育系学生の資質向上をめざす、よりよい授業づくりのためにも「体験を通して学ぶ」学生の姿を教員として確かに把握したい（授業の自己評価）という気持ちが強い。

そこで本稿では、私（筆者）が担当した「こどもと読み聞かせ・絵本」（2015年度、2年生後期の科目、2単位）の授業実践の記録を基に「体験を通して学ぶ」学生の実例から、彼らの学びの軌跡を明らかにし、その成果と課題について考えてみる。

2. 実践研究の目的と方法

【目的】

絵本を園児の前で読み聞かせするという保育者の行為に関して、大学2年生が「その体験」を通して学んでいることは何なのかを学生の言葉から

2016年11月30日受付

* 江戸川大学 子どもコミュニケーション学科教授 児童教育、絵本学

実証的に捉える。

【方法】

- ①授業初め（1回目）と終わり（15回目）に実施したアンケート調査による学生自身の記述（言葉）の変容を捉える。
 - ②園での読み聞かせの前に、事前学習として行った学生の個人学習とグループ学習での様子からの考察（授業中の記入用紙などから）。
 - ③園での読み聞かせの後に、事後学習として行った個人学習とグループディスカッションでの学生の様子からの考察（授業中の記入用紙などから）
- ※体験先はキャンパス内にある、えどがわ森の保育園の3歳児クラスから5歳児クラス。

3. 「子どもと読み聞かせ・絵本」授業について【授業の概要】（シラバスより）

絵本には目的・内容によって生活・ファンタジー・科学絵本等がある。ストーリー展開、装丁の工夫等について、多くの絵本に触れながら多面的に学ぶ。そして絵本の魅力をさまざまな視点から実感することを出発点にして、絵本の良さを伝えるための読み聞かせの技術や配慮事項について、実践的に考察する。さらに園児の前で絵本の読み聞かせを行う演習を通して、聞き手（子ども）の想像力をはばたかせる読み聞かせのあり方や読みの技術について考えを深め、本を大切にす気持ち、絵本を愛する心を育む。

【目標】

絵本についての関心と知識を深め、創作の楽しさや読み聞かせの技術を協同的かつ実践的に学ぶ。

【実施スケジュール】

- | | |
|-----|-------------------------------------|
| 第1回 | オリエンテーション、絵本の魅力とは。各自の今までの絵本体験の掘り起こし |
| 第2回 | 絵本の意義、戦後始まった読み聞かせ運動の歴史を知る |
| 第3回 | 【グループワーク】私の「思い出の一冊」読み聞かせを互いに聴き合う |

- | | |
|------|--|
| 第4回 | 【園体験】保育園での読み聞かせを行う |
| 第5回 | 部分指導案の書き方を知る |
| 第6回 | 【グループワーク】絵本（教材研究）、読みの聴き合い、部分指導案を作成する |
| 第7回 | 【園体験】指導案に基づき保育園での読み聞かせを行う |
| 第8回 | ブックスタート、一歳から二歳にお勧めの絵本について話し合い理解する |
| 第9回 | 「三歳から四歳」科学絵本などの場合。読み聞かせの留意点について理解する |
| 第10回 | 「就学前」接続期以降の絵本について話し合い考えを深める、読みの聴き合い |
| 第11回 | 【グループワーク】自分で絵本を選び、部分指導案を作成する、読みの聴き合い |
| 第12回 | 【園体験】（年齢・内容・読み聞かせ前後）を工夫して園での読み聞かせ、相互評価 |
| 第13回 | 【園体験】（年齢・内容・読み聞かせ前後）を工夫して園での読み聞かせ、相互評価 |
| 第14回 | 【園体験】（年齢・内容・読み聞かせ前後）を工夫して園での読み聞かせ、相互評価 |
| 第15回 | これまで授業・体験で学んだことをまとめる |

※「指導案を書くこと」については未体験の学生達なのでグループワークを取り入れて理解を補い合うようにした。

※「第4回、第7回の園体験」では読み聞かせをする側にたつこと、「第12回から14回」では読み聞かせをする側と見る（聞く）側、というように立場を交代しながら行った。

※園の生活リズムを乱さないように、読み聞かせに訪問する時間帯は昼休み（12:40 から 30 分間程度）とした。

園児にとっては給食とお昼寝のあいだの時間帯。大学生にとっては、3限の授業を30分前倒しにして調整。

※園での読み聞かせ後は、園の先生方の感想や意見を聞き、学生指導に活かすよう心がけた。

※絵本は大学の保育実習室に備えてあるものを主に使用した。自宅にあるものや図書館から借りてくるケースも見られたが少数である。

※森の保育園との交渉は、年度の初めに学科全体で依頼し、双方の合意・承諾を得てから、担当者が細かい打ち合わせを行うという学科独自のシステムになっている。

4. 授業はじめ（1回目）のアンケートより

授業開始にあたり、各学生に「今までに園児を前にして絵本の読み聞かせをした経験回数」と「自分が園児の前で読み聞かせをすることで一番心配なこと」を書かせたところ以下のとおりであった。

学生	回数	心配なこと
A	0	声の大きさ
B	0	聞いてくれるか
C	0	楽しんでくれるか
D	0	伝えられるか
E	0	聞いてくれるか
F	0	緊張してしまう
G	0	緊張してしまう
H	0	緊張してしまう
I	0	声の大きさ
J	1	間違えないか
K	1	聞いてくれるか
L	2	飽きないか
M	2	見てくれるか

N	2	かまずに読めるか
O	3	聞いてくれるか
P	3	集中してくれるか
Q	3	楽しく見てくれるか
R	3	内容が伝わっているか
S	3	年齢にあった選択
T	3	緊張してしまう
U	5	飽きずに聞いてくれるか
V	5	興味を持ってくれるか
W	5	年齢にあった選択
X	多	興味を持ってくれるか
Y	7	集中して聞いてくれるか
Z	8	読み間違い
A2	10	理解してくれるか

—初回アンケート結果からの考察—

- (1) 約半数の学生が、読み聞かせ体験0～2回であることから考えて、園での子どもとの触れあいを含めて読み聞かせ体験を複数回実現する必要があるだろう。
- (2) 学生の心配ごとは、その不安の質によって3種類に分類することができるだろう。
 - ①声の大きさや読み間違いなど「事前の読み込み練習によって克服できるもの」
 - ②聞いてくれるか、見てくれるか、興味を持ってくれるかなど「実際に読み聞かせしながら解消あるいは解決するであろうもの」
 - ③年齢にあった選択、緊張の緩和など「読み聞かせを終えてから考えるべきことや養うべき自信に類するもの」
- (3) これら学生の不安の質的な実態の分析から考えて、園での読み聞かせを中核として、3つの段階での指導上の配慮をする必要があるだろう。
 - ①に対応するために、事前の練習時間の確保（個人練習と対人練習の組み合わせ）。
 - ②に対応するために、子どもの前で行うときの、

する人・みる人という立場分けの工夫（主観的把握と客観的理解の組み合わせ）。

- ③に対応するために、園から帰ってきてからの事後学習の持ち方の工夫（自己省察とディスカッションの組み合わせ）

(4) 以上のことから、授業における学生の不安や心配を起点にした学びの実現を図る実践研究の仮説は、このようにまとめられる。

体験の「前」と「後」の指導の工夫、すなわち、個人学習とグループ活動の組み合わせを図り、気づきの自覚化（文字化）を促すことが、体験をとおした学びを明確にするのではないだろうか。

5. 園での読み聞かせ体験の「前」

一私の練習と、私達のグループワーカー

まず、保育実習室の絵本戸棚から自分で選んだ絵本（読み聞かせしてみたい絵本）を一人でじっくり読む時間をとる（約30分間）。黙読または音読を3回以上行い、読み取り記入用紙にあらすじと感想を100字程度で書くことを課した。

学生自身が、書くことによって本の内容や特色を理解し、また、声を出すことによって読みへの抵抗を減らすことができるだろうと考えたわけである。

その個別練習（学習）をした後、グループ活動に入る。3歳児グループ、4歳児グループ、5歳児グループというように、選んだ絵本の読み聞かせを実際に行う対象年齢を想定して、学生自身がその日入るグループを決めた。

読むことと聴くことを交代で繰り返すことによって、学生自身が発見する学びに注目したい。

※この時のワークシートは右上の通り

聴き合う体験をメモとして書き留める、このワークシート利用を重ねるなかで、他者の読み聞かせを「聞いてみて、どうだったか」項目の記述内容に変容が見られた。

初めのうち、声がよく聞こえた、読みが速すぎ

- ぎょう、ひびいてよんだ(黙読^は音読)絵本
- ① シルクハートをくは ちよかの いちじにやってくる おくはらゆめ
 - ② いつでも星を エメリリンレイ 絵 マー・フレイザー 訳 長谷川
 - ③ 不思議な三匹の子猫 オットー・アリアー 訳 いづみおとし
 - ④ ちいさなねこ マー・石井和子 訳 横内 薫
 - ⑤ ぼくがラーメンを食べるとき 長谷川 義史

グループ内 おみきかたに使用して: 絵本

自分	おみき	おみきかた
■	カエルのおアかけ	内容が最近の出来事と重なる。めくる時「うれしかった」
■	わさびは、こんばんは	内容に今、落ちついた声で読めた。
■	わたしのワンピース	女の子らしいお話で、女の子らしい読み方だった。
■	あつし びょうきに「おはなさい」	痛みの人にも見えるように意識していた。
■	ぎょうはマラカスのひ	内容が「スリース」に入ってくるようには読めなかった。

る、読み間違いがないかなど「読むスキル」に関して言及していた学生がほとんどであったが、次第に、内容にぴったりした声でよかった、心があたたかくなる、など「絵本の内容と声や表情のマッチング」に目を向けて言及する学生が多くなったのである。参考数値：スキル着目15名→内容言及23名。

絵本理解と相手理解が深まるとともに、読み聞かせは心が伝わるかどうかだという気づきが確かなものになっていったと捉えることもできよう。

言い換えれば、「声を聴く」体験を重ねることによって、単純に「声を出す」行為の善し悪し判断から、「伝わる内容」と合わさったその人の総体としての「人の味わい」に気づくようになる、という学びの過程が見て取れる。「声（音として聞こえるもの）の発見」から「人（味わい）の発見」へというように学びの質の変容を捉えることもできる。一般的な捉えが、より個別的個性的になったとも言えよう。すなわち、立場を変えることは学びを複層的なものにするのである。

聴き合いワークシートだけでなく、さらに先の読み取り記入用紙にも変容が見られた。

初めのうち、あらすじと感想の区別がつかずに

混同したり（ぜひ読んでみてください）など通り一遍のお勧めの言葉で済ませてしまう学生が多かった。そこで、修正を促すために、授業後に教師が書き方のチェックを行い、よく書けているものを次回のモデルに示すなどの指導を繰り返した。良いものを真似ることは学びの始まりである。あらずじと感想を分けて書くことに意識を向けられる学生が少しずつであるが増えた。

いずれの記入用紙（ワークシート）においても、一人で書く・複数人で読み合う・良いところを他者から学ぶ（真似る）・一人で書き直す、という個人と集団の往還関係を取り入れることが、思考を深めるための重要な手がかりになることがわかった。

6. 園での読み聞かせ体験

—他者の反応を感じる—

授業前半での2回の体験は、学生全員が絵本を1冊ずつ園に持って行って、園児約5人の輪のなかに座って読み聞かせを行った。呼吸が聞こえるくらいの近い距離での読み聞かせである。

学生達ほとんどが、保育園にも子どもにも慣れていないことから、小規模であることを優先し、そのような形態をとった。「読み終わった後、子どもが楽しかった、また来てねと言ってくれて、すごうれしかった」などの感想があり、緊張はするけれどもまたやりたいという期待感がふくらんだ様子であった。

授業後半の3回は、学生が自分の希望と判断で

3歳・4歳・5歳グループに分かれ、「よむ人」と「評価する人」と立場を交代しながら行った。

7. 園での読み聞かせ体験の「後」

—気づきはコミュニケーションを経て—

保育園から大学の教室に戻ると、その日、読み聞かせをした学生は自分の「部分指導案の反省欄」に自己評価を書き込む。読み聞かせを聴いた側の学生は、「評価用紙」に気づいたことをまとめる。どちらのためにも「書く（考える）時間」を少なくとも15分間程度は確保するように心がけた。

自分の言葉をしっかり記した後、入ったクラス（年齢ごと）にグループディスカッションをする。ディスカッションに慣れないため、順番に自分の書いたものを読み上げるだけの姿からのスタートだったが、「質問をつぶやいていいんだよ」と声をかけ、少しずつ言葉が交わせるようになってきた。以下はグループディスカッション時のコミュニケーションの一例である。

A（読み手）「内容が5歳には難しいかなあと
思っていたけれども、最後まで静かに聞いてくれた」

T（聴き手）「言葉はわからなかったかもしれない。でも、だから、興味をひいたのかも」

S（聴き手）「字も絵も小さいし、後ろの子にはよくわからなかったと思う。でもAさんの表情が良かった。おもしろいんだよっていう気持ち
が伝わってきた」



写真1 保育園で実際に絵本を読み語る



写真2 学生同士も聞きあって考える

A (読み手)「細かい絵には、ちょっと指さす、ここ見て・・・みたいに工夫したつもりでやってみただけけど・・・」

B (聴き手)「それで注目してる子は多かったみたい。終わったあとで、その本もう一回見せてって寄ってた子がいたんだから成功だと思う」

A (読み手)「興味はもってもらえたのかな」

D (聴き手)「ストーリーが大事だって、今まで思って本を選んでいたんですが、きょうのAさんのを見て、ストーリーにこだわらなくてもいいんだって思いました」

実はこの授業以外の場での発見なのだが、この学科の学生達に出会った当初、ディスカッションが苦手な学生達であることを教師として痛感した。ディスカッションという形態に強い抵抗があり、意見を言うのはいや、自信がない、こんなこと言っていないのかなと心配になって言えない、意見は特になく、という学生の様子に、これは何とかしなければと思ったものであった。

ものを言うためには、言いたいことや感動が不

【授業最後 (15 回目) のアンケートより】

授業最後のまとめとして、読み聞かせをする際に自分が気をつけることを思いつく限り箇条書きで書くように課したところ、以下のような言葉が生まれた。

学生 (書いた項目数)	読み聞かせをするときに留意すべきこと (複数箇条書きしたものから原文のまま抜粋)
A (18)	子どもの心の中をつぶやきを感じ取りながら読む。子どもの生活や遊びに沿った絵本選び、環境に合わせた読み方。絵本の作品分析。保育者同士での実践交流。初めるとき、どのように絵本の読み聞かせに入っていくか、考える。
B (15)	心を込めて読む。子どもに伝えたいメッセージを明確にする。緊張しないようにしっかり練習する。本を持つときの高さや場所
C (21)	子ども達全員に本が見えているか。めくるスピード。髪の毛を結ぶ。ネイルをしない。子どもの目線になりどのような工夫をすると集中できるか考える
D (16)	年齢にあったものを選ぶ。はっきりと話す。読み聞かせに入る前に言葉をしっかりと集中できるようにする。子どもが興味をもつところを予想して、そこを盛り上げられるように組み立てる。声の大きさを考えて出す。読んでいるときに余裕が出てきたら聞き手を見る。ページのめくり方、シーンに合わせて変える。ゆっくり一字一字大切に読む。想像しやすいようにゆったりと大きく口をあけて読む。短すぎず長すぎない絵本を選ぶ。明るい表情で読む
E (8)	全体が聞こえる声の大きさ。笑顔で表情よく読む。何に興味のある歳なのか確認する
F (17)	髪の毛を結ぶ。アクセサリーつけない。正常な爪。前の手遊びなど集中できるように楽しさを加える大きな声でゆっくり
G (17)	服装をだらしくしていかないこと。前髪が目にかかる人はとめること。派手な化粧はしない。1回練習しただけで満足しないこと。ページめくりがスムーズにいくようにすること。見えやすい位置まで本を挙げて読むこと。声の大きさは場所によって変えること

可欠だろう。他者の一生懸命な絵本の読み聞かせを聴いた直後なら、楽しく心を動かされ気づいたことを言いやすいのではないかと考えた結果、読み聞かせ体験後にディスカッションの場を設けることにしたのである。

そもそもディスカッションには、集団で意見を出し合って折り合いをつけ合意形成するためのものと、意見 (異見) を聴いて視点や視野を広げながら個々の意志を明確にするためのものと、その目的によってプロセスの学びの意味合いは異なるものであろう。今回は後者である。

ディスカッションという形態が、自分にとって新発見や考えの強化 (自信) につながるのだという実感が得られれば、この種の言語活動への抵抗感も減るのではないだろうか。

この試みは緒についたばかりであり、コミュニケーションが活性化する効果の気配はあるが確かとは言えない。今後も実践研究を継続する必要がある。

I (19)	絵本の位置、子どもの視線、ページをめくるタイミングや速さに気をつける。声の大きさや速さを絵本の内容によって変える。手の位置で絵が見えなくならないように。絵本の大きさ（小さすぎないように）。読む前の問いかけ。季節にあった絵本
J (17)	読み間違いのないよう下読み。利き手と逆手でしっかり持つ。表紙を見せて表題をしっかりと読む前と後の問いかけ。はい、おしまいではない、感じたことを一緒に話す
K (19)	よく読んで理解する（作品分析）。笑顔を忘れない。自分自身が楽しむ 語りかけるようによむ
L (12)	目を合わせながら読む。絵をしっかりと見せる時間をつくる。自分で事前に練習する 大きな声で（基本）聞こえるように、全員見られるように心がける
M (4)	何歳かにあった絵本。みんなこっちを向いて聞いているか。笑顔になって盛り上げる。4から6歳児には、飽きたなどの発言がないよう、内容が長く意味のこもったファンタジーなどを選ぶ
N (6)	声は大きくハキハキと。登場人物によって言い方を変える。片手でしっかり持つ。オープニングとエンディングを考える。服装をきちんとする
O (17)	字がなくてもきちんと見せる。どんな様子で聞いているのか見ながら読む。読み終わったら表紙を見せる。やたら感想を聞かない。めくりやすくなるよう折り目をしっかりとつける
P (10)	心を込めてよむ。自分が絵本のキャラクターになりきる。子ども達の顔をよく見る。表紙や裏表紙を見せる。そのときの環境に合った読み方
Q (20)	見やすい高さを考える。全員が見えるように開く。絵本がふらふらしない。繰り返し読み込む 子ども達の顔も見るといい。ていねいにめくる。本の大切さを知ってもらう。自分も楽しそうに読む
R (16)	下読みをしっかりと。ひっかからないように意識。自分がその絵本の魅力を知っていて子どもに伝えたいという思いがあること。はいおしまい、でなく、感じたことを一緒に自由に話してみること
S (19)	全員に聞こえる声の大きさと読む。後ろの子に見えるように高さを合わせる。絵本が上を向かないように手で絵を隠さないように。文を短くしたり勝手にしない。読み間違いがないようにする。1ページ1ページをゆっくりゆくりみなが絵を見られるように。ひとつの物語をきちんとイメージしながら読む。次の活動を考えて本を選ぶ。子ども達の発達の様子を見て絵本を考える。この本をよんで何を伝えたいか。言葉を正しく使われているものを読む
T (8)	声の大きさ、強弱、間の取り方。全員に見えるように、子ども達の顔を見て読むことが大切。笑顔で読む
U (10)	絵本が見えない子がいないか確認する。速すぎず遅すぎず適切な速さでよむ。めくるスピードに気をつける。強弱をつける。例えば「わあ」とか少しおおげさに。派手な服装で読まない。絵本が汚れてしまっても、保育者が大切に扱うことを見せる
V (19)	読む前に絵本のお話しへの期待感を子どもに持たせる。じっくり絵を見ることができるようになる 子ども達の反応に合わせて読む。子ども達の反応で学ぶ。自分なりに工夫してよむ。子ども達の視線を意識する
W (11)	子どもの家庭の状態などに配慮し、その子にとって傷つく作品は読まない。すべての子どもが見えるようなイスの配置に気を配る。事前に読み込み、緩急や強弱などチェックしておく。読むときの姿勢に気をつける。手遊びなどの導入をとりいれ、スムーズに絵本を読み始められるようにする
X (26)	年齢にあった絵本。子どもの育てたい面を考え、それに合った絵本。読む前と後のことばかけ。作者名までしっかりと読む。何度も繰り返し読む練習をする。裏表紙まで絵本のすべてを見せる
Y (18)	年齢にあったもの、こどもの生活や体験に基づいた本を選ぶ。本のカバーははずす。子どもの想像力を邪魔しないようにリアクションはさける。ページをとばさない。大人（読み手）自身も楽しむ子ども達にきちんと目を向け、目を合わせながら読む。はっきりと話す。読み聞かせに入る前に言葉をしっかりと集中できるようにする。子どもが興味をもつところを予想して、そこを盛り上げられるように組み立てる。声の大きさを考えて出す。読んでいるときに余裕が出てきたら聞き手を見る。ページのめくり方、シーンに合わせて変える。ゆっくり一字一字大切に読む。想像しやすいようにゆったりと大きく口をあけて読む 短すぎず長すぎない絵本を選ぶ。明るい表情で読む
Z (11)	心を込めて絵本の世界に自分も入りながら読む。こんな風に思うんだろうなと考えながら間を取ったり抑揚をつけたりする。子どもの遊びに沿った絵本選び。その時の環境や人数に合わせた読み方 絵本の作品分析。むやみに答えを言わない。自分で考える力をつけるため
A2 (8)	絵本の高さ、後ろの子達にも見えているか。声の大きさ、後ろの子達にも聞こえているか。言葉、子ども達が知らない言葉はないか、説明を交えて。スピードが的確であるだろうか、子ども達を見ながら。絵本の世界に入らせてあげる
B2 (12)	見やすい位置に絵本を持つ。後ろまで聞こえるように読む。セリフは声を変えるなどわかりやすいようにする。子どもが集中しているか時々見ながら読む。読む前は絵本を隠し、秘密にする。まじめな絵本は静かに、楽しい絵本は楽しそうに読む
C2 (12)	心を込めて読む。内容が頭に入るまで練習する。こどもの反応を大事にする 絵本を触りたがる子が居たら壊されないように見守りながら触ってもらう

8. 体験を通して学ぶこと、学生にとっての意味

－成果と課題－

学生同士で、また園児の前で、絵本の読み聞かせを繰り返すという体験を経て、学生の気づいたことが、前項の表にあるとおり実感を伴う個人的な言葉として表現されていた。

例えば「ネイルをしない」「前髪を留める」など身だしなみに関する配慮が実践的に必要なこととして自覚されたこと。

「子どもの季節遊びに沿った絵本選び」「そのときの人数に合わせた声の大きさ」など、目の前の子どもにしっかり目を向けようとする姿勢が生まれたこと。

「子どものつぶやきを感じ取りながら読む」「子どもの反応に合わせて」など、読み聞かせをする側の思いだけでなく、子どもの反応に学ぶという保育者として将来不可欠な資質・態度が表れ始めたこと。

「むやみに答えを言わない、自分で考える力をつけるため」「次の活動を考えて絵本を選ぶ」など、子どもを保護援助する側面だけでなく教育者として育成目標をもつという意識の芽生えがあること。

「絵本を読んだあと触りたがる子がいたときの対処」「子どもの家庭状況をよく知って、絵本を選ぶ」など、絵本を扱うことそのものへの配慮に言及するという、より保育者像が学生自身の

なかに生まれたこと。

これらは、学生が体験を通して学んだことの「我が事としての成果」である。

一般的で教科書に載っているような表現というよりも、現場的な知恵となるような表現に近づいている。自分が子どもの姿に接して実感したことが、その人らしい気づきの表現（言葉）になっているからである。体験してみても気づきの自覚化（文字化）が、学生個々の学びを明確にすることは実証できたと言えよう。

また、学生相互の「気づきの交流」が気づきの幅を広げることや気づきの種類を増やすことも確かめられた。

しかし、今回の授業実践の最中に筆者が感じたことでもあるが、ディスカッションの活性化への工夫は足りなかった。そもそもディスカッションという形態が読み聞かせ後のグループ学習（気づきの交流）に最適かどうかの検討も必要である。

つまり、「グループ学習という体験」による学生の学びについては自分（教師）の中で未だ不明なことが多い。

以上の成果と課題を、来年度の授業実践への自らの問いとしてつなげる決意を述べて、本稿のまとめとする。

参考文献

- 玉瀬友美『保育の教育における読み聞かせ経験』風間書房 2012
 ドナルド・A・ショーン著 柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的实践とは何かープロフェッショナルの行為と思考』風書房 2007